

2. 漢字は前進あるのみ

毎日、本を出して読ませることが大切です。一日、一ページから二ページ。一冊を一か月で終えるか、二か月で終えるか、それに従って適当に割当ててください。

一回の指導は、五分から十分くらい。気分転換のつもりで、何かの学習に飽きを感じ出した時に、前に学習した漢字のおさらいなどをしますと、元気をふき返します。

心理学者の実験報告によりますと、学習した事柄を忘れるのは、学習後一時間以内が最も多いそうです。一時間以後は忘れる割合がだんだんと少なくなっていくのです。

だから、学習した漢字を、四、五十分経ってから、つまり、間に何か別の学習、または休み時間をおいて、おさらいをするのが、漢字学習の上では最も有効な方法です。

一般に、“記憶”の原理は、“関心”と“反復”だと言われていますが、一般的な復習の時期は、

一時間以内

まる一日後

一週間後

一か月後

というように、記憶期間がだんだん長くなるのに応じて、間が空いてもよいようになります。しかし、いくら反復しても悪いことはありません。むしろ、反復することにより、必ずそれだけ記憶は強固になるのですから、出来たら、どの学習の時でも常に初めからおさらいすることに努めたいものです。

これまで述べてきたように、文字は、漢字から学ばせることが“絶対に”必要です。実体に即して漢字が存在することを幼児に理解させ、幼児たちが、“文字とは、内容(実体)のあるものを表す符号”であることを、理屈でなく、体で理解させるように努めます。

同時に教えない

子供に漢字を与えるのは、植物に肥料を与えるのによく似ています。肥料を施したからと言って、その場で、その植物がニョキニョキと伸びてくるわけではありません。

むしろ、肥料を施したことを忘れた頃になって、その肥料が根から吸収され、いつとはなしにその効目が現れてくるものです。

漢字もそのように、「教えた、さあ覚えなさい」というわけにはいきません。教えられた漢字が、いつとはなしに頭に刻まれて、読めるようになるのです。

ある漢字が“読める”“意味が解る”“書ける”と言っても、そこには習熟の程度やその期間によって、いくつもの段階があるのです。習熟を重ねるに従い、期間を経るに従って、その質が向上していくのです。どんなに練習したところで、目に見えてすぐに向上するものではありません。

植物の成長する様を観察しますと、絶えず、ずるずると伸びている

コラム

部首 非

で、鳥が両翼を開いた形を表したもので、翼が左右反対に向いているというので、“反対”または“否定”。“いけない”“悪い”にも。

【悲】 “心の中でこうありたいと願っていることと反対の結果になって悲しい”。

【輩】 “車が押しのけ合うようにぎっしり並んでいる”こと。つまり“多くの車”が本義。今は車に全く関係なく、“多くの人”“仲間”。

のではないことが解ります。ひょこん、ひょこんと伸びるのです。変化しない時期と飛躍する時期とあるのです。もっとも、変化しない時期があるとと言っても、それは外から見えないというだけのことであって、内部では、どんな変化をしているか解りません。

幼児が漢字を覚えていく様子も、この植物の成長の仕方によく似ています。覚える時には驚くほどいっぺんにたくさんの漢字を覚えます。しかし、ある時期は、覚えるのを休んでいるように見えます。

よく覚える時には、頭が休んでいるのでしょうか。決して、そう単純には言えないと私は思います。覚えるのを休んでいる時こそ、整理するために、頭が大活躍しているかもしれないのです。

ともあれ、幼児の漢字を覚える仕事は、機械が物を処理する仕方とは本質的に違っている、という事実を認める必要があります。

漢字は忘れた頃に覚えられる！？

提出した漢字を幼児たちが習得しないうちは、決して次へ進まない、という先生がよくあります。

幼児の、言葉を覚えていったその覚見方をよく考えてみてください。

幼児は常にたくさんの言葉を耳にしています。それを、その中からどれということもなしに、いつともなく身に付けていっているのです。一つの言葉を覚えないうちは、他の言葉は教えない、というやり方で言葉を教えたら、幼児は言葉が使えるようにはとてもなれないだろうと思います。

漢字を幼児に与えたら、それを覚えようと覚えまいと、知ったことじゃあない、幼児に漢字を与える、それが仕事で、その仕事が済んだら、あとはお役目放免、先生はそんな気持ちでいなさいというのが“石井方式”です。

教師が漢字を指導したことなど忘れてしまった頃になって、漢字は徐々に幼児の頭に吸収され、貯えられるのです。

「天災は忘れた頃にやって来る」と言いますが、「漢字は、教えたことを忘れた頃に覚えられる」と言えるのではないのでしょうか。

先に聞いた言葉を覚えないうちは、後に聞いた言葉は覚えられない、ということがあり得ないように、一つの漢字が覚えられないうちは、次の漢字が覚えられない、というものでは絶対にありません。

覚えようが覚えまいが、次から次へと、新しい漢字を提出していく、すると、後から提出された漢字のほうを先に覚え、それが前の漢字に

関連して、それまで覚えられなかったのに簡単に覚えられた、そういうことがよくあるのです。

「池」が与えられた。覚えられない。次に「海」が与えられた。すると、「池」と「海」がいつぺんに覚えられた。……こういうことが、実際には多いのです。

それは、先にも述べましたように、「池」が覚えられない時に、頭が休んでいたわけではなく、記憶作業は進行していたのかもしれませんが、ただそれが外に結果として現れないだけだったのかもしれませんが。

だから、「池」に似た「海」が新しく与えられたことによって、(それが刺激となって)「池」の記憶が完成したのかもしれないのです。

ともあれ、覚えようと覚えまいと、ひと所に止っていることのないようにしてください。停滞は禁物です。前進しましょう。